

平成 19 年度試験研究成果書

区分	指導	題名	オリサストロピン粒剤のは種前床土混和およびは種時覆土前散布のいもち病に対する効果的な使用方法			
〔要約〕オリサストロピン粒剤のは種前床土混和およびは種時散布は、育苗期および本田期の葉いもち防除効果が高いが、本田期では移植当日散布より残効がやや短く、穂いもちに対しては防除効果が期待できない。またこの使用法はトリコデルマ・アトロピリデ水和剤による種子消毒の防除効果を低下させる。						
キーワード	オリサストロピン	いもち病	は種前床土混和	は種時散布	病害虫部 病理昆虫研究室	

1 背景とねらい

水稻の重要病害であるいもち病に対して効果の高いオリサストロピン粒剤とその混合剤（商品名：嵐箱粒剤、嵐プリンス箱粒剤 6）は、は種前の床土混和およびは種時覆土前散布が適用拡大となり、処理方法が多様であることから使用方法の選択性が高く、作業性が向上すると考えられる。そこで本剤の特性を活かした効果的な使用方法について検討した。

2 成果の内容

- (1) 本剤の使用法は、育苗箱あたり 50g のは種前床土混和またはは種時覆土前散布である。
- (2) 本剤のは種時覆土前散布は育苗期の葉いもち防除効果が高いことから、育苗期の茎葉散布による葉いもち防除を省略できる（図 1）。
- (3) 本剤のは種前床土混和およびは種時覆土前散布は、移植当日散布と同等に高い葉いもち防除効果が得られるが、移植当日散布より残効が短い場合がある。また穂いもち防除効果が期待できない（表 1）。
- (4) 本剤のは種時覆土前散布は、トリコデルマ・アトロピリデ水和剤の種子消毒による防除効果を低下させるので、他の種子消毒剤を使用する必要がある（図 2）。

3 成果活用上の留意事項

- (1) 本剤のは種前床土混和は、は種時覆土前散布と同様の育苗期の葉いもち防除効果があると推察される。
- (2) 本剤のは種前床土混和は、は種時覆土前散布と同様にトリコデルマ・アトロピリデ水和剤の防除効果を低下させると推察される。
- (3) 本剤のは種前床土混和およびは種時覆土前散布を行った場合、は種後から発芽が揃う時期（出芽長 2～3mm）に 5 以下の低温に遭遇すると発芽抑制や生育遅延が発生することがあるので、温度管理に注意する。
- (4) 本剤のは種前床土混和またはは種時覆土前散布を行う場合は、7 月 15 日頃に圃場を巡回し、葉いもちの発生があったら直ちに茎葉散布を実施する（表 1）。
- (5) 育苗ハウスで後作を行う場合、薬剤が作物に影響を与えないようにプール育苗を行うか、苗床に無孔シートを敷く。
- (6) ストロビルリン系薬剤（オリサストロピン剤、メトミノストロピン剤、アゾキシストロピン剤）の使用は年 1 回以内とする。
- (7) 本成果で示した使用方法が可能な本県で流通するオリサストロピン粒剤は、嵐プリンス箱粒剤 6 である。

4 成果の活用方法等

- (1) 適用地帯または対象者等 県下全域
- (2) 期待する活用効果 水稻の安定生産に寄与できる。
葉いもち防除効果が優れる。
使用方法の選択性が高く、作業性が向上する。

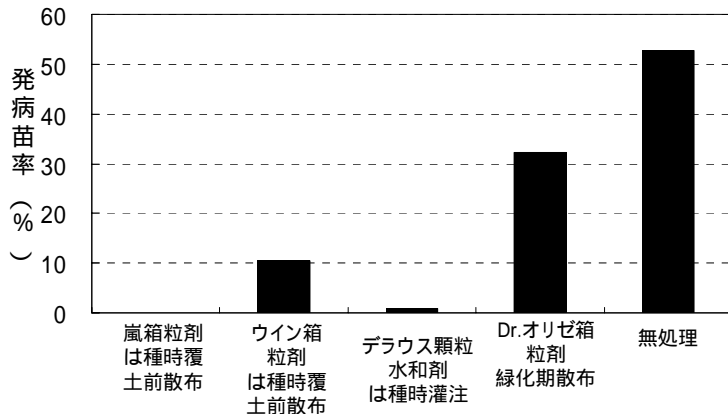
5 当該事項にかかる試験研究課題

(402)新農薬の効果検定と防除基準作成、民間委託（H09～H22）

6 参考資料・文献

- (1) 平成 19 年度研究成果（案）「トリコデルマ・アトロピリデ水和剤（商品名：エコホープ DJ）の効果的な使用方法」
- (2) 平成 16 年度岩手県農業研究センター病理昆虫研究室試験成績書
- (3) 平成 17 年度岩手県農業研究センター病理昆虫研究室試験成績書（未定稿）
- (4) 平成 19 年度岩手県農業研究センター病理昆虫研究室試験成績書（未定稿）

7 試験成績の概要



平成 17 年 育苗温室試験

調査方法:3 葉のひとめぼれ苗に、 $10^4 \sim 10^5$ 個/mL の分生子懸濁液を接種し、1 苗あたり約 2~5 個の葉いもち病斑が形成された苗を鋏で 5cm に切断し、播種 24 日後(約 3 葉期)苗箱に箱あたり 25g 均一にふりかけ、ラプシートをかけて管理した。発病を促すため、ラプシートの上から朝と夕方霧吹きで散水した。接種 9 日後に 1ヶ所あたり 200 苗を 3 カ所、計約 600 苗/箱について葉いもち病斑の形成されている苗を調査し発病苗率を算出した。

図 1 オリスastrobin粒剤の育苗期の葉いもち防除効果

表 1 オリスastrobin粒剤のいもち病防除効果

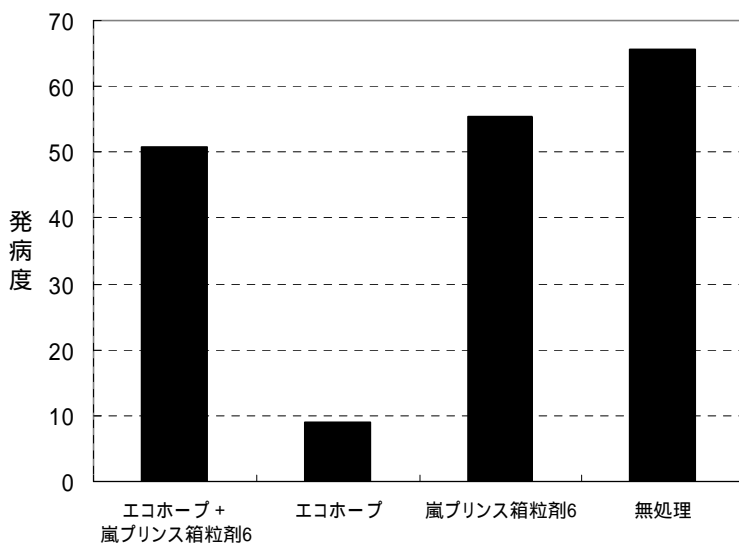
調査年度 場所	薬剤	処理時期	処理方法	7月中旬		7月下旬		8月上旬		葉害
				株当り病斑数	株当り病斑数	防除価	株当り病斑数	防除価		
平成16年 岩手農研	嵐箱粒剤	は種前	床土混和	0.2	33.9	-	7.5	71.2	-	
	嵐箱粒剤	は種時覆土前	散布	0.2	41.3	-	8.1	69.0	-	
	嵐箱粒剤	移植当日	散布	0.0	10.4	-	1.5	94.2	-	
	ウィン箱粒剤	は種時覆土前	散布	2.3	31.7	-	9.9	62.1	-	
	無処理			38.4	94.6	-	26.0	-	-	
平成17年 岩手農研	嵐箱粒剤	は種前	床土混和	0.3	15.8	86.1	-	-	-	
	嵐箱粒剤	は種時覆土前	散布	0.3	5.9	94.9	-	-	-	
	嵐箱粒剤	移植当日	散布	0.4	11.9	89.6	-	-	-	
	Dr.オリゼ箱粒剤	移植当日	散布	6.3	34.1	70.2	-	-	-	
	ウィン箱粒剤	は種時覆土前	散布	1.1	67.3	41.0	-	-	-	
	無処理			56.4	114.2	-	-	-	-	

上位 3 葉株当たり病斑数は平成 16 年は 8 月上旬、平成 17 年は 7 月下旬に調査、7 月中旬は株当たり病斑数調査。

摘要:

・葉いもちの発生は、7 月中旬までは嵐箱粒剤のは種前床土混和、は種時覆土前散布、移植当日散布で同等で対照剤より高い防除効果が得られるが、嵐箱粒剤のは種前床土混和、は種時覆土前散布は 7 月下旬には残効切れする場合がある。

・穂いもちに対しては嵐箱粒剤のは種前床土混和、は種時覆土前散布は効果が期待できない。



平成 19 年場内育苗温室試験、1/10 スケールの育苗箱使用、3 反復

エコホープ処理は 32 で催芽時 24 時間浸漬した(5 月 21 日)。

嵐プリンス箱粒剤 6 のは種時処理は、は種後覆土前に散布した(5 月 22 日)。

苗立枯細菌病の発生を促すため、催芽および出芽は 32 で行った。

調査は播種後 16 日に枯死苗、白化苗数を調査し、発病度 = $(3 \times \text{白化苗数} + 5 \times \text{重症苗数}) \times 100 / (5 \times \text{調査苗数})$ として算出した。

図 2 エコホープによる種子消毒と嵐プリンス箱粒剤 6 の体系防除の苗立枯細菌病に対する効果